

私の創る理想の街

— 障害のカベをなくすために —

49期生

I テーマ設定の理由

なんだかテーマを見ると自分が真面目でよい子ちゃんのような気がしますが、私はどちらでもありません。ただ自分の住む国である日本が、『福祉後進国』と言われているのがイヤで、誰か困っている人の役に立ちたいという私の夢を叶える第1歩となるように、そしていつか私の考えた街がこの国のどこかで誕生し、いつか日本が『福祉超先進国』と呼ばれる日がくるといいなあと思い、このテーマを選んだのでした。

II 研究方法

(1)文献調査

障害を持つ人には、生活する上で、現在どのような不便があるか調べる。

(2)実態調査

実際に街に出て、工夫されているところ、不十分なところを見つける。

(3)創造

以上のことをふまえた上で、バリアフリー社会の実現された街を創造する。

④今回の研究は屋外のみに限りました。

III 研究内容

只今、日本の総人口は約1億2500万人にもものぼる。その中で視覚障害者は418619人、聴覚障害者は446297人、車イス使用者は59628人を占めている。しかし車イスは個人で購入した場合、特に届け出は必要ないので、車イスを使用する人の正確な数はわからないとのこと。上に書いた車イス使用者は、国または地方自治体が全額負担し、給付した人数なのである。私はこれら3つの障害をもつ人がどのような不便な感じているかを調べた。

(1)駅

*券売機で

障害者が一人で駅を利用する場合、まず切符を買うことから困難である。視覚障害者だと行き先までの料金がわからなかったり、わかっても券売機に点字表示なかったりする。障害者の行動範囲を広げるためには点字料金表の設置、券売機の料金点字表示が必要である。また車イスだと硬貨投入口が高くて切符が買えない事が多いので、どの駅にも一台ぐらいは車イスでも利用できる券売機の設置が望ましい。

*ホームで

ホームへ行くには大抵階段の昇り降りが必要である。しかし点字ブロックの敷設されていない階段は視覚障害者にとって大変危険であるので、階段には手すりが必要で

ある。また車イスでは階段が使えないのでエレベータも設置されればよい。そうすれば妊婦さんやお年寄りも安心してホームに行ける。

又、ホームには相対式ホームと島式ホームという2種類がある。相対式ホームは図のように線路をはさむようにホームがあるものをいう。寺田町駅も相対式ホームである。このようなホームは視覚障害者が一人で歩いても、転落の危険性は低い。というのも、ホームにカベがあるのでまっすぐに歩けるからである。また島式ホームは、ホームの両側に線路があるものをいう。島式ホームは相対式ホームとは逆に、視覚障害者が一人である際、極めて危険を伴うホームである。視覚障害者は一人で歩く際、白杖（視覚障害者が一人で歩く時用いる杖をいう）のみに頼らなければならず、大変危険で一步間違えればホームに転落するおそれがある。そのため点字ブロックが敷設されているわけであるが、これは万全というわけではない。

以上のことをふまえると、理想のホームは相対式ホームであることが望ましい。さらに視覚障害者の転落防止のために、乗降口以外のところに柵を、そしてホームには点字ブロックが設置されるとよいだろう。

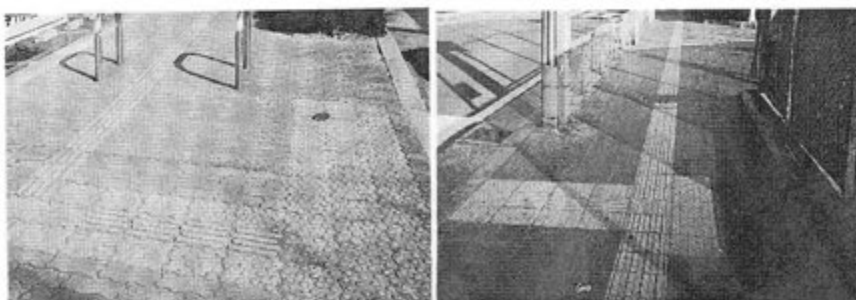
***アナウンス**

もしも事故や天候で電車が遅れたり、運休したりするとアナウンスが流れる。しかし、この時、聴覚障害者は聞こえてはいない。こういう時は、ちゃんとの確に事態を伝えるためにも紙にかいて提示すべきである。

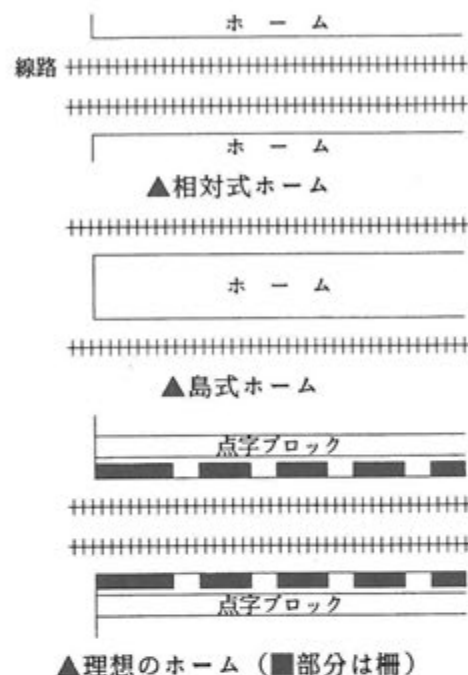
(2)道路

***点字ブロック**

点字ブロックには誘導ブロックと警告ブロックがある。誘導ブロックはそのまま前へ進んでよしというサイン、警告ブロックは、この先

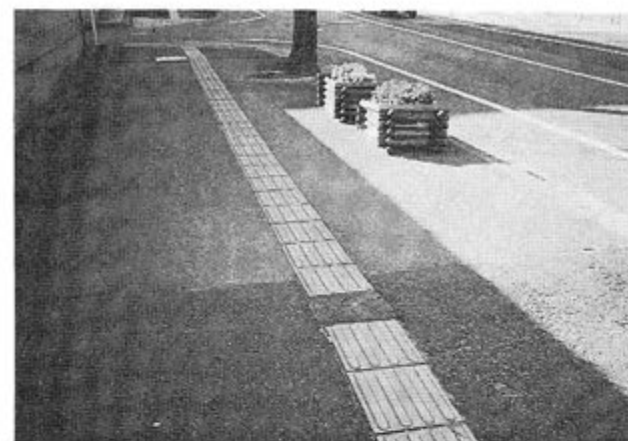


▲大きさ・デザインの違う2つの点字ブロック▲



▲理想のホーム（■部分は柵）

何らかの変化があることを知らせるサインである。そんな点字ブロックは、視覚障害者が一人で歩く時の手助けになるのであるが、かなり統一性に欠けているのが実情である。左下の写真が例である。一つは30cm四方、もうひとつは15cm四方である。視覚障害者は30cm四方の点字ブロック統一されることを望んでいるようである。

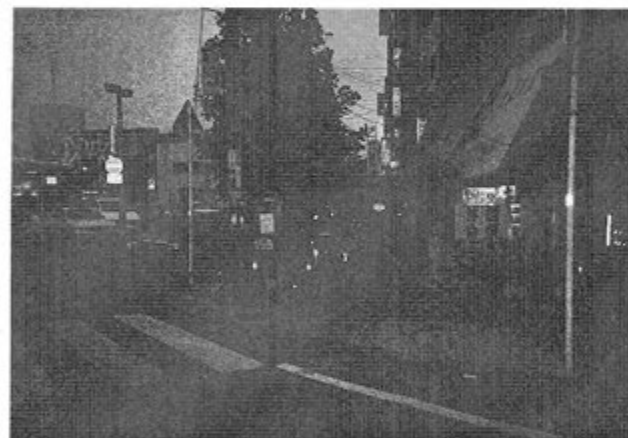


▲途中でとぎれている点字ブロック

右の上の写真の中で一ヶ所点字ブロックがないところがある。

どうしてないのかはわからないが、この一ヶ所がないだけでも視覚障害者は不安を抱くことになる。他にも、無造作にしかれた点字ブロック、つまり誘導ブロックであるはずのところ警告ブロックだったり、又はその逆だったりすることであるが、これも不安を招く材料となる。

さらにいくら正しく点字ブロックが敷設されていても、右の写真のように上に自転車や人が乗っていたら何の意味もない。そのところをしっかりと意識する必要がありそうである。



▲点字ブロックの上にいる障害物

***信号**

青になると音のなる信号機（音響式信号機という）が、視覚障害者に青を知らせる手段となっているが、これには欠点がある。

1. 朝、夜はならない。

（大体PM9:00~AM6:00までの間）

2. 交差点の場合、特に初めての時はどこが青なのかわからない。

この欠点を克服するには振動式信号機の設置がある。振動式とはその名の通り振動して青を知らせる。振動する棒みたいなものがついている（信号に）ので、どこの信号が青なのか、さわれば間違いなくわかるようになっている。そんな信号機がたくさんできればいいのだが、私は実際にみたことが一度もない。そのほかに障害者を配慮した信号機として、交通弱者用ボタンのついた信号機がある。このボタンを押せば、少し青の時間が長くなり、障害者をはじめ、妊婦やお年寄りもゆっくり渡れるというぐあいになっている。この信号機が私が毎朝通る道についているのだが（写真）、以前はボタンのみしかついておらず、表示がなかったため、あのボタンが何をしてくれる

のわからなかった。今は右の写真のように表示がなされているが点字表示がないので、万能とはいえないようである。

また横断歩道は視覚障害者が真っすぐ歩くための点々をつけられているところが少なく、又、つけられていても、点と点がはなれているのが実態である。先程述べたように点がすまなくしきつめられていなければ視覚障害者は不安を抱くのである。

*でこぼこの道、段

道にでこぼこがあったり、段がたくさんあると車いすのとき、かなり困る。

私の最寄り駅である近鉄大阪線大和高田駅は、車いすの人のために、階段を昇らなくてもすむ特別なスロープが設けられている。そこに設置されているインターホンをおせば駅員がかけつけてくれるようになっている。しかし、そのスロープを使うためには、踏切を渡らなければならない。それが右下の写真である。ここは交通量が多いのに歩道がなく、おまけに段ができてきている。これでは車いすの人が一人で行動するのは困難である。交通量の多いところにはせめて歩道を敷設するべきである。

*その他

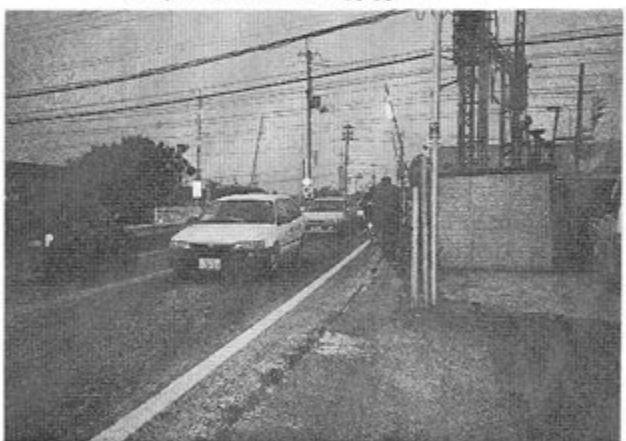
車いすは両手でこぐため、雨が降っても傘がさせない。又、視覚障害者も傘をさすといろんな情報（におい、風の流れなど）がさえぎられるので、ささない

ことが多いという。そういう人たちのためにも、もっとアーケードがついたならばいいことだと思う。さっき上で車いすは段が大敵であることを述べたが、そのため歩道橋などは使えない。だからあまり歩道橋はつくらず、横断歩道を作ってほしい。他に車いすでは進めないところに、寺院や神社の砂利道がある。車いすのタイヤが砂利に埋まってしまうからだが、それを防ぐために、車いす用の道路などを隅にでもつくってはどうかと思う。

▶交通弱者用ボタン



▲車いすのための特別スロープ



▲スロープへ続く道

(3)公衆電話

*車いすでも使える公衆電話

最近をよく見かける普通よりかなり低い位置にあるのが車いす用の公衆電話である。そして車いすでも使える電話BOXが普及しはじめている（写真）。しかし、この電話BOXの開け方は普通のものと一緒にため、車いすでは開けにくいなど、まだまだ改善されるべき点は多い。

*公衆FAXの設置

聴覚障害者のために駅でFAXサービスを行っているところは多いが、公衆電話のように、いつでもどこでもというわけにはいかない。そのために公衆FAXを設置してはどうだろう。公衆電話を使うよりはやや割高になるだろうが、お金をいれど紙がでてきて、それに必要事項を記入し、FAXするというものである。FAXの普及率も上がってきていることだし、近い将来、実現されるかもしれない。



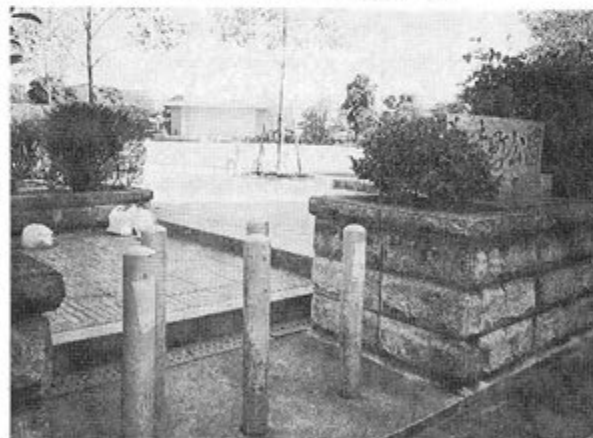
(4)自動販売機

右の写真のように普通の自動販売機は車いすでは使えない。又点字表示もないため視覚障害者も使えない。コカ・コーラ社によると、車いすでも使える自動販売機も設置しはじめているということだった。車いすでも使える自動販売機とは、普通のものより、ボタンが低い位置にあるということだったが、点字表示のことなどを考えても、改善が期待される。

▶自動販売機



▶公園の車止め



(5)公園

写真のように普通、公園には車やバイクが入ってこないようにするために車止めが設けられている。しかしこの車止めは車いすの進入も妨げてしまう。その対策として回転式の車止めがあると新聞にのっていたが、これも車いすの人一人ではうまく使いこなせないとのこと。車止めなど必要のない街が早くできるとよいのであるが、それができないのが現状である。

IV 結論・考察

このように、一見何不自由なく過ごせそうな街も視点をかえれば、冷酷さをあらわにします。どの視点から見ても不自由なく過ごせる街づくりが今後の課題です。そして、忘れてもらいたくないことがあります。私達が何不自由なく過ごせるのは、私達の目が見えるからでも、耳がきこえるからでも足が動くからでもないということです。私達が使える設備が整っているから日々過ごせているということです。例えばトイレ。目が見えなくても点字表示や点字ブロックがあれば視覚障害者も使えますし、車いす用のトイレがあれば車いすでも使えます。ここでもうひとつみなさんの心にとめてもらいたいことがあります。それは、いくら街の設備が整っても理想の街はつくられないこと、そして逆に例え設備が不十分でそこに住む人々によっては理想の街がつけられるということです。つまり設備はなくても、困っている人を見ればあたり前に助けられる人々の住む街こそが理想の街だということです。日本の障害者の中には健常者からの手助けを拒む人も多いそうです。手助けによって他人に迷惑をかけたと思い、自分もイヤな思いをするからだそうです。手助けがあたり前でないからゆえ起こる現象です。また欧米ではあまり点字ブロックは普及していないのに、日本の障害者よりもずっと障害者の行動範囲は広いのです。それはたくさんの人が手助けをしている証拠といえるでしょう。早く日本もこのような状況をつくりたいものです。しかし、受け身のままでは状況は生まれません。今から困っている人を見つけたら助けるという気持ち、持ち続けて下さい。

V 総括

今回の自由研究はよく足を使ったことと、再発見が多かったことが印象的です。自転車、そして徒歩でいろんなところへ何度も足を運びました。中学校3年間やってきた自由研究、最後だから……と思ったのかもかもしれません。再発見が多い自由研究は初めてで、悪く言えば新鮮味にかけたのですが、その分、しっかりと考えることができたと思います。そして自分の考えの甘さを痛感することになったのでした。例えば、視覚障害者は、目のみえない人だけをさすのではないということ、目の見えにくい人も真っすぐ歩けるように点字ブロックはまわりの舗装道路とはっきり区別できる色でないといけないということです。そして障害者も遊びたい、歌いたいなんていう感情はあたり前にもっているということも自由研究を通して知ることができました。少し考えればわかることなのですが、『障害者は生きるのに精一杯で遊びなんて考えるヒマなんかないんだ』という考えが自由研究を始めるまで私の頭を埋めつくしていたのでした。他にもいろいろ考えの甘さをはっきり感じた自由研究で、3年間の集大成にふさわしいものになったと思います。さて、今後の街づくりの予定を少し述べておくと、奈良県では市町村単位で福祉計画の作成をするように県からいわれており、大和高田市はまだ作成中とのことでした。

VI 参考文献

- ・ 慎 英弘著 視覚障害者に接するヒント 解放出版社
- ・ E&Cプロジェクト編 “音”を見たことありますか? 小学館
- ・ 村田 稔著 車イスから見た街 岩波ジュニア新書238